

「表記の手引き」類に準拠したテキストにおける表記のゆれ —実態調査と発生理由の検討— 増地ひとみ

現代日本語の文字言語においては、語表記の「ゆれ」が観察される。この表記のゆれは、独自の「表記の手引き」類（以下「手引き類」）を有し、それを拠り所にして表記を決定している新聞のような媒体においても見られる。本発表では、手引き類に準拠してもなお生じる「ゆれ」の実態を調査し、ゆれが生じる背景を考察する。

本研究は、音声を文字化する業務に携わる専門家（以下「技術者」）が文字化したテキストにおける表記のゆれの実態調査と、技術者へのアンケート調査とによって、Ⅰ～Ⅲの順にて行った。Ⅰ．本研究用に作成した音声データ（27分、5,048語で構成）を7名の技術者が同一の手引きに準拠して文字化した。文字化の際、技術者は表記の選択に迷った語を特定した。Ⅱ．アンケート調査により、Ⅰで特定した語に関して、表記の選択に迷った理由を尋ねた。また、最終的に採用した表記を選択した理由も尋ねた。Ⅲ．佐竹秀雄（2016）「日本語の表記のわかりにくさ」（『わかりやすい日本語』くろしお出版、pp.26-27）で提示されている語表記のゆれの13タイプを枠組みとして、ゆれが生じた語の分析を行った。加えて、いずれの技術者も表記の選択に迷わなかったにもかかわらずゆれた語も考察の対象とした。

品詞では形容動詞、形容詞、接頭辞、ゆれのタイプでは「カタカナとAlphabetの対立」「外来語表記における対立」において、同一の基準に準拠することで比較的ゆれが抑えられていたが、これら以外の各群ではゆれが発生していた。同じ手引きに準拠してもゆれが発生する背景には、言語的要因と非言語的要因がある。言語的要因の主たるものは、同音訓異義語・類義語・同義語、多義語、許容（送り仮名等）が認められている語の多さ、文字種の使い分けの困難さである。非言語的要因には、ハンドブックに由来することと表記者に由来することとがある。前者はハンドブックに記載されておらず、基準を求め得ないケースが多々存在する点である。後者は、表記者におけるハンドブックの確認不足や思い込み等、また、就業時にのみ適用される技術者独自のルールが存在である。